

戦隊ヒーローは公開調教ショーでベル
トを奪われ屈して種を注がれる

2026

•

9

•

23

目次

第
01
話

第
02
話

第01話

「ソウタ、右膝を狙わせろ！」

夕方の市街地で、シンエンは闇星連合の巨大兵器の脚を殴りつけた。

火花が散り、鉄の脚がぐらりと傾く。

遠くで避難のサイレンが鳴っている。

「了解。ヨウ、右膝！ 突っ込め！」

副官のソウタの号令で、最年少のヨウが真っ先に飛び出した。

黄色い刃が、兵器の右膝の裏に深く刺さる。

高いビルの縁では、フカラが片膝について狙撃銃を構えていた。

「風は西。ミズキ、ずれを直してくれ」

「頭のとっぺんにコアがある。今なら五人で合わせられる」
ミズキが端末をたたきながら答えた。

「全員、合わせろ！」

ソウタの号令と同時に、五人のベルトが光った。

フカラの弾が兵器の目を撃ち抜き、赤く燃えたシンエンの拳が頭のコアを割る。

巨大兵器は膝を折り、地響きを残して大通りに沈んだ。

「オーロラファイブ、任務完了」

マスクの下で、シンエンは息を吐いた。

四人とも立っている。

それを見て、やっと肩の力が抜けた。

「今日の、派手だったね。リーダー、帰ったらご飯おごってよ」

ヨウが残骸を軽く蹴って笑った。

「先に後片づけだ。闇星の残りがまだいる」

シンエンは、倉庫街のほうに上がる煙を見た。

そのとき、ミズキの端末が鳴った。

「倉庫街に敵の反応がある。ここから一番近い」

「待て。その信号、闇星の通信に似てるぞ」

フカラが止めたときには、ソウタはもう倉庫の入口に着いていた。

「リーダー、床に焦げた丸い跡がある。これ、転送の――」

「下がれ！」

叫ぶより早く、五人の足元で丸い光が噴き上がった。

ソウタの肩をつかもうとした指が、光の中ですり抜ける。

最後に見えたのは、端末を床にたたきつけるミズキの手だった。

ヨウの叫び声が耳に残り、足の裏から床が消えた。



冷たい鉄の匂いで、シンエンは目を開けた。

足首には拘束の輪がはめられ、膝は曲げられない角度で固定されている。

鉄の檻が五つ、横一列に並んでいた。

赤、青、黄、緑、紫。

五人が一人ずつ、別々の檻に入れられている。

檻は鎖で吊られ、その下には底の見えない穴があいていた。

壁の看板に「シヨールム」と光る文字がある。

すり鉢の形をした客席が、檻をぐるりと囲んでいた。

最前列には闇星の幹部候補たちが座り、通路には下級戦闘員がぎっしり立っている。

隣の檻では、ソウタが青い肩章を柵に押しつけて、こちらをのぞきこんでいた。

その向こうで、ヨウは片膝を鎖で吊り上げられ、黄色い膝当てを客席に向けさせられている。

フカラの手首には光る輪がはまっていた。

ミズキのベルトの画面には、見たことのない文字が流れている。

四人とも、マスクを外されていた。

マスクをつけたままなのは、シンエンだけだった。

シンエンは足首の輪を引きちぎろうとした。

いつもなら鉄でも曲げられる脚に、まるで力が入らない。

スーツは、ただの重たい布になっていた。

ベルトに手を伸ばす。

起動の音はしなかった。

「なんでだ、ベルトが動かない……！」

「無駄だ」

スピーカーから、低い男の声が落ちてきた。

壁の大きな画面に、闇星の幹部、ノア・ザルムの顔が映る。

黒い軍服に銀の肩章をつけた、白い顔の男だった。

「お前たちのベルトは、もう俺の端末で動く。変身するのも解くのも、お前たちには決められない」

ノアが端末を持ち上げると、五人のベルトが一斉に暗くなった。

「五本を同時に動かす仕組みを作ったのは、お前たちだ。鍵を一つ奪えば、五本とも止まる」

ソウタが柵をつかんで、力いっぱい揺さぶった。

「リーダー、俺が先に出る——」

「暴れるな、副官。お前が暴れれば、隣の檻が沈む」

鎖が鳴り、ヨウの檻がガクンと下がった。

ヨウは歯を食いしばって、悲鳴をこらえた。

フカウは、震える右手を左手で押さえつけている。

「すまない……私の通信が……」

ミズキが、ベルトの画面を見下ろしてかすれた声を出した。

画面の隅に、『倉庫への信号 送信元…ミズキ』と文字が出ていた。

「お前の通信は正確だからな。使わせてもらった」

画面の顔が消える。

入れかわりに、正面の階段からノア本人が降りてきた。

「助けは来ない。お前たちは今日から、ここの見せ物だ」

「落ち着け。まだ何も分かってない」

フカラが低く言った。

「リーダー、五人とも息はある。まだ崩れるなよ」

ソウタが続けた。

シンエンはうなずくだけにした。

口を開けば、声が震えてしまう。

ノアは檻の前で立ち止まり、客席に両手を広げた。

「ヒーロー解体ショー、開幕だ。町を守ってきた正義の味方が、

ここでどう壊れていくか。色の順に、一人ずつ見せてやる。最初は

赤、リーダーからだ」

「リーダー、挑発に乗るな」

フカラの短い声が聞こえた。

シンエンは奥歯をかみしめた。

檻の天井が開いた。

下りてきた鎖が両腕に巻きつき、体を檻から引きずり出す。

客席の前の台に吊るされたところで、マスクがむしり取られた。

素顔が、客席にさらされた。

赤いスーツはそのままだ。

マントは捕まったときに引きちぎられ、首元に切れ端だけが残っ

ている。

客席の明かりが一斉についた。

まぶしい。

下級戦闘員たちが口笛を吹き、にやにやとシンエンを見上げてくる。

「リーダー！」

ヨウが叫んだ。

「叫んでもいいぞ、黄。そのぶん青の檻を沈める」

ノアは振り向きもしなかった。

ヨウは、声を腹の奥に押し戻した。

ノアはシンエンのあごを指で持ち上げ、客席に顔を向けさせた。

「スーツは脱がさない。正義の色を着せたまま、中身だけ折ってやる」

指が、スーツの胸の真ん中に触れた。

布の下の筋肉が、びくりと跳ねる。

「触るな……見るな……！」

「今日は触るだけだ。声は出すなよ。出したら、青の檻を沈める」
仲間の前で、こんな姿を見せるわけにはいかない。

シンエンは、天井の暗がりだけをにらみつけた。

ノアの手のひらが、胸の装甲の継ぎ目をなぞって下りていく。

首にも鎖が回されていて、横を向こうとしてもすぐに引き戻された。

背中にも、客の目がはりついている。

指は腰のベルトまで下りて、バックルの縁で止まった。

「分かるか。お前のベルトは、もう俺の指一本で動く」

ノアがバックルの縁を押した。

熱が、スーツの中へ流れこんだ。

腰が、ひとりでに跳ねる。

のどまで上がってきた声を、シンエンは唇に血がにじむまでかみ殺した。

熱は、下へ下へと集まってい^く。

スーツの中で、ちんぽがむくりと頭をもたげた。

——やめろ。

——今、ここで勃つな。

止めようとしても、止まらなかった。

薄い赤い布が、内側から押し上げられていく。

ちんぽの形が、竿から先の段差まで、そのまま布に浮き出た。

客席のあちこちで、笑い声が上がった。

「おい、見ろよ。正義の味方のちんこ、勃ってるぞ」

「スーツの上から触られただけでこれか」

「リーダーのくせに、ちんこはずいぶん素直だな」
やじが飛ぶたびに、顔が焼けるように熱くなった。

「客に見せてやろう」

ノアの手のひらが、張りつめた股間を下から包んだ。
布ごと、ちんぽをぎゅっと握られる。

「ッ……！」

声が、齒の隙間で止まった。

手のひらが、ゆっくりと上下に動いた。

根元から先まで、布の上から一本の指でなぞり上げる。

先のくびれのところで、親指がくると円を描いた。

腰の奥が、びくびくと勝手に震える。

「硬いな。さっきまで町を守っていた男のちんぽとは思えない」

ノアの声は、客席に聞こえる大きさだった。

シンエンは、首を横に振った。

振った首を、鎖が引き戻した。

ノアの親指が、先の割れ目を布の上から押しつぶした。

じわり、と布に濡れた点が浮いた。

「ほう。もう漏らしているのか」

赤い布の先に、我慢汁の染みが広がっていく。

親指が離れると、濡れた布が先に張りついて糸を引いた。

「濡れてるぞ！」

「ヒーローの我慢汁だ！」

客席がどっと沸いた。

「リーダー……」

隣の檻から、ソウタのかすれた声がした。

「副官は目をそらすな。そらしたら、それも映す」

ノアは、そちらを見もせずに言った。

ソウタは柵に肩をぶつけた。

青い肩章が裂けそうになる。

「リーダー、頼む。声だけは出すな……！」

手が、また動きはじめた。

今度は、速かった。

布ごと握ったちんぽを、根元から先まで一息にしごき上げる。

クチュ、と濡れた布が小さく鳴った。

我慢汁が布の中でぬめり、しごく動きがどんどん滑らかになっていく。

シンエンは、台の手すりを握りしめた。

指の関節が白くなる。

腰が、その手を追いかけて前へ出た。

——出したくない。

——こんなところで、出したくない。

太ももの内側が震えはじめた。

玉がきゅうつと上に上がっていく。

あと少しで、出る。

そう分かった瞬間、手がぴたりと止まった。

「ハ……ッ、ア……」

息だけが、口から漏れた。

声ではなかった。

ノアは握ったまま、客席に向き直った。

「今のは息だ。声じゃない。今日は見逃してやる」

客席から、残念そうな声と、笑い声が同時に起きた。

ちんぽは、握られたままびくびくと跳ね続けていた。

出る寸前で止められた熱が、行き場をなくして腰の奥にこもっている。

親指が、もう一度だけ先の割れ目を撫でた。

とろり、と新しい我慢汁が布からあふれた。

「見ろ。止めても、まだ漏れてくる」

壁の画面が切り替わった。

濡れて色の濃くなった赤い股間が、画面いっぱいに映し出される。

その横に、ソウタの顔が大きく並べられた。

「明日も赤の番だ。明日お前が声を漏らしたら、次は青になる」

ノアはシンエンから手を離し、濡れた指をマントの切れ端でぬぐった。

「初日はここまで。続きは明日、配信つきでやる」

客席から、物足りなそうな声と、明日を待つ拍手が同時に起きた。

吊られたままのシンエンは、勃ったままのちんぽを隠すこともできなかつた。

鎖が巻き戻され、体は檻の中へ落とされた。

床に手をついたシンエンに、隣の檻から声がかかる。

「リーダー、大丈夫か」

「……ああ」

うそだった。

スーツの中で、ちんぽはまだ硬く張りつめていた。

先から垂れた我慢汁が、太ももの内側で冷えていく。

ソウタは柵をつかんだまま、黙ってこちらを見ていた。

壁の大きな画面には、濡れた赤い股間とソウタの顔が、並んだま

ま映り続けていた。

第02話

その夜、シンエンだけが檻から出され、一人きりの小部屋に閉じこめられた。

壁一面が監視の画面になっていて、ほかの四人の檻が映っている。

画面に音はなかった。

ソウタの檻が、ゆらゆらと揺れていた。

ヨウは片膝を吊られたまま目を伏せ、フカラは両手を膝に置いて動かない。

ミズキのベルトの画面は、ずっと赤く点滅していた。
シンエンは鉄の床に座り、腰のベルトを見下ろした。
触っても冷たいだけで、何の音も返ってこない。

スーツの中では、出せなかった熱がまだ重たく残っていた。
画面の中で、ソウタの口が動いた。

声は聞こえなくても、何を言っているかは分かった。

『リーダー、俺が代わる』

ヨウも何か叫んでいたが、すぐに戦闘員に口をふさがれた。

扉ののぞき窓が開いた。

ノアが立っていた。

「眠れないか、リーダー」

「仲間を放せ。やるなら俺だけにしろ」

「お前だけじゃ、客がすぐ飽きる」

ノアは、画面の中のソウタに目をやった。

「だが、今いちばん客が見たがっているのはお前だ。明日は声を
出してもらう」

「誰がお前の客のために鳴くか」

「さっきは、あと一息だったぞ。唇をかんで、血まで流して、ちんぽの先からは我慢汁を垂らして」

のぞき窓が閉まった。

シンエンは、唇の傷を指でなぞった。

まだ少し痛んだ。

眠れないまま、どれくらいたったのか分からない。

スピーカーが鳴った。

「二日目だ、赤。昨日の決まりは覚えているな。声を漏らしたら、次は青だ」

鉄の扉が開き、下級戦闘員がシンエンの腕をつかんだ。

「歩け。客はもう入ってる」

通路の壁にも画面が並び、どこを歩いても、唇をかむソウタの顔が先回りしてくる。

シンエンは画面を見ないと決め、床だけを見て歩いた。

「見なくても同じだ。今日はお前の声ひとつで、あの画面の中の青がどうなるか決まる」

後ろから、ノアの声が追いかけてきた。



ショーレムの客席は、昨日よりずっと混んでいた。

通路の階段にまで下級戦闘員が座りこみ、最前列の幹部候補たちは酒の杯を手に行っている。

「昨日の赤だ！」

「今日は鳴くのか？」

「ちんこ、今日も勃たせてくれよ！」

ほかの四人の檻は、客席の上の高いところまで吊り上げられていた。

やじの中を引かれていくと、ノアが台の上で待っていた。

「今日から配信も始めた。闇星の基地という基地で、みんながお前を見ている」

ノアが端末を掲げた。

腰のベルトが、勝手に鳴った。

赤いスーツが脈を打つようにふくらみ、胸と肩に装甲が戻ってくる。

脚の先まで、赤い線が走った。

だが、マスクは戻らない。

マントもない。

「半起動だ。スーツだけ動かした。力はないし、自分で脱ぐこともできない」

シンエンはベルトをつかんだ。

解除の音は返ってこない。

「戻せ！　こんな中途半端な……！」

スーツが、内側から締めつけてきた。

熱がこもり、肌にぴったり張りついて離れない。

昨日ただの布だったスーツが、今日は熱い手のように全身をつかんでいた。

胸の先が、布にこすれて硬くなる。

股間も、布ごと下からすくい上げるように締めつけられた。

ちんぽの形が、昨日よりもくつきりと布に浮いた。

声だけは出さない。

シンエンは、自分にそう言い聞かせた。

鎖で引かれ、ステージの真ん中の台に立たされる。

台がせり上がり、どの席からもよく見える高さで止まった。

四方からライトが当てられ、自分の影さえ足元から消えた。

客の視線が、膝から股間、股間から赤い胸へとはい上がってくる。

「今日の決まりは昨日と同じだ。赤が声を漏らせば、青の檻が沈む。そして明日は青の番になる」

ノアが客席に向かって言い、客が手をたたいた。

壁の画面に、高く吊られた檻の中のソウタの顔が大きく映し出された。

齒を食いしぼり、目だけでこちらを見ている。

「見ろ。副官がお前を見ているぞ」

シンエンは目をそらし、のどの奥で息を止めた。

ノアの手のひらが、胸の装甲の継ぎ目をなぞった。

継ぎ目のすき間から指が入りこみ、硬くなった乳首を布の上から探り当てる。

指先で、きゅっとつままれた。

「ッ……」

「乳首も立っているな。スーツが締めつけるたびに、ここがこすれるだろう」

つまんだまま、くりくりとひねられる。

そのたびに、腰の奥がびくりと跳ねた。

ちんぽが、布の中でさらに硬くなる。

「我慢している顔がいいな。副官にもよく見せてやれ」

「見せ物なんかに、なるか……」

「もう立派な見せ物だ。ほら、下を見ろ」

指先が、股間の先をとんとたたいた。

赤い布の先に、昨日と同じ濡れた点が浮いていた。

もう、染みは広がりはじめている。

「まだ触ってもいないのに、先がこれだ」

客席がどっと笑った。

次の指が、腹の装甲を押しこんだ。

腰が跳ねた。

「つ………！」

漏れた息を、マイクが拾った。

「聞こえたぞ、赤のリーダー」

シンエンは首を振った。

「首を振っても無駄だ。今の音は、もう録った」

画面のソウタが、唇をかみ直した。

歯が食いこみ、血がにじむ。

その顔がさらに拡大され、シヨールームじゅうに流れた。

「青は我慢している。お前が鳴けば、青の檻を沈めるぞ」

ソウタの目は、「耐えろ」と言っていた。

その目に見られていることが、シンエンには何より恥ずかしかった。

客が床を踏み鳴らしはじめた。

同じ調子の足音で、鉄の檻が揺れる。

「リーダー、耐えて！」

頭の上の檻から、ヨウの声が降ってきた。

ノアが端末をひとたたきすると、その声もぷつりと途切れた。

手のひらが、太ももの内側をゆっくりはい上がってきた。

スーツの熱が、その指を追いかけるように集まってくる。

指は股間の手前で止まり、張りつめた玉を布ごと手のひらにのせた。

やわやわと、揉まれる。

シンエンは、台の手すりを握りしめた。

——声を出せば、ソウタの檻が沈む。

——明日は、ソウタがここに立たされる。

それだけを、頭の中でくり返した。

「そろそろ仕上げだ」

ノアの手が、ちんぽを布ごと握った。

昨日と同じ握り方だった。

体が、それを覚えていた。

握られただけで、先からどつと我慢汁があふれた。

「覚えていたな。昨日、ここで止められたことを」

ノアは握ったまま、もう片方の手でベルトの下縁を持ち上げた。
た。

熱が、スーツの中へ直接押しこまれた。

締めつけるスーツの中で、ちんぽがどくどくと脈を打つ。

握った手が、しごきはじめた。

根元から先へ。

先から根元へ。

グチュ、グチュ、と濡れた布が鳴る。

その音を、台の下のマイクが全部拾って客席に流した。

「聞こえるか、客ども。これが正義の味方のちんぽの音だ」

笑い声と口笛が、四方から降ってきた。

膝が震えた。

腰が、手の動きに合わせて勝手に前後に揺れる。

「腰を振っているぞ、リーダー」

「ちが……」

言いかけた口から、息より大きなものがこぼれそうになった。
シンエンは唇をかんだ。

昨日の傷が開いて、血の味がした。

ノアの親指が、先の割れ目にぐりつとねじこまれた。
布ごと、割れ目を押し広げられる。

「ア、っ……や、や、め……見ないで……！」

声が抜けた。

客席が、割れるような歓声を上げた。

画面の中で、ソウタの檻が鎖ごとガクンと沈んだ。

自分の声のせいだ。

そう分かってても、一度あふれた声はもう止まらなかった。

「ア、ア、ツ、手、止め、ア……！」

手は止まらなかった。

むしろ、速くなった。

グチュ、グチュ、グチュ。

「出るのか、赤。客の前で、スーツの中に出すのか」

「ちが、ア、ちが……ア、ア、ア、ア」

玉が、きゅうつと上がった。

昨日止められたところを、今日は止めてもらえなかった。

「アアッ——！」

ちんぽが、握られたまま跳ねた。

ドクッ。

熱い精液が、スーツの中に噴き出した。

ドクッ、ドクッ。

一度では終わらなかった。

昨日からため込まされていたぶん、何度も何度も跳ねては吐き出した。

赤い布の先から、白い精液がじわりとしみ出してくる。

布では受けとめきれず、股間の縫い目を伝って太ももの内側へ垂れていった。

「出したぞ！」

「スーツの中で射精しやがった！」

「ヒーローのザーメン、垂れてるぞ！」

客席が総立ちになった。

幹部候補たちが杯を掲げ、配信のコメントが画面を埋めていく。

膝から、力が抜けた。

後ろから、腰を押さえつけられた。

シンエンは半起動の赤いスーツのまま、客の前で台に膝をついた。

ノアは、まだちんぽを握ったままだった。

出したばかりで敏感になった先を、親指でくりくりとこね回す。

「ヒ、ツ、ア、今、触るな、ア、ア」

「まだ残っているだろう。全部出せ」

「もう、空っぽ、だから、ア、やめ……」

ぎゅうつと根元から先へ、しぼり上げられた。

ドロ、と残りの精液が押し出されて、布の先からあふれた。

「止めてくれ……頼む、もう……」

弱い声だった。

それでも客席は、それを降参として受け取った。

ヨウの檻のマイクが一瞬だけ戻った。

「リーダーは負けてない！ 負けてないってば！」

その叫びも、すぐにまた消された。

「さあ、許しを乞え。客が待っている」

「誰が……許しなんか……！」

シンエンは、ひざをついたまま顔を上げた。

「ふざけるな、こんなの、お前が勝手に触って、勝手に出させただけだろう、俺は負けてない、ソウタの檻を沈めたのも、お前だ、

声を出したのは俺だけど、出させたのはお前で、スーツを動かしたのもお前で、俺は、俺は何ひとつ、自分で決めてない……！」
言いながら、自分でも何を言っているのか分からなくなっていた。

太ももの内側を、自分の精液がゆっくりと伝い落ちていく。

ノアは端末を操作した。

止めてくれ。

許しなんか。

見ないで。

さっき漏らした声が、壁の画面に波の形で並んだ。

ノアはそれを材料にして、機械に同じ声で別の言葉をしゃべらせた。

スピーカーから、シンエンの声が流れた。

「……もう、許して。俺の負けだ」

言った覚えのない言葉だった。

つなぎ目のない、なめらかな自分の声だった。

客席から、「言った、言った」と笑いが起きた。

「そんなこと、口にしてない……！」

「お前の声だ。客はそう聞いた」

画面のソウタが、目を見開いた。

かんでいた唇から、血が一滴落ちた。

「明日、これを青に聞かせる。リーダーは負けを認めた、とな」

「ソウタは関係ない……！」

「卑怯だと言いたい顔だな。卑怯で結構だ。こっちは闇星だからな」

ノアは、精液で濡れた手をシンエンの頬でぬぐった。

それから客席に向かって、芝居がかったお辞儀をした。

「二日目はここまで。明日は青の番だ」

にせの声が、壁で何度もくり返される。

シンエンは、精液で重くなったスーツのまま鎖で吊られた。

半起動のスーツは、冷めないまま体を締めつけていた。
出したばかりのちんぽまで、布が容赦なく締め上げる。

画面の中で、ソウタの口がゆっくり動いた。

音はなくても、唇の形で読み取れた。

『リーダー、俺は信じてる』

明日、そのソウタがこの声を聞かされる。

太ももの内側で、乾きはじめた精液がつっぱった。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名 戦隊ヒーローは公開調教ショーでベルトを奪われ屈して種
を注がれる

サークル タビューへ

発行日 2026・9・23

レーティング R18